

【原著論文】

## 学校給食の時間における指導目標の因子論的分析

齊藤 るみ\*1・石井 雅幸\*2・雲財 寛\*3・稲田 結美\*3・角屋 重樹\*3

\*1 日本体育大学大学院教育学研究科博士後期課程

\*2 大妻女子大学

\*3 日本体育大学

本研究の目的は、給食の時間に身に付けさせたい指導の目標を、因子論的に分析することから、構成する目標項目を特定することとそれらを類型化することである。このため、学校給食によって、目指す子供の姿を設定し、まず、給食の時間に身に付けさせるべき指導の目標を構成する目標項目を措定し、因子論的に分析することから、指導目標の構造を明確にするという方法を用いた。具体的には、指導目標に関して身に付けさせることの大切さという視点から5件法で判断させる質問紙調査を教員養成課程の大学生(87名)を対象に実施した。その結果、給食の時間における指導の目標として、「食品、栄養に関する事項」「食べ方に関する事項」「食事の社会的側面に関する事項」の3群、14項目が抽出できた。

キーワード：学校給食，指導目標，給食の時間

## Factoristic Analysis of Teaching Goals During School Lunch Time

Rumi SAITO\*<sup>1</sup>, Masayuki ISHII\*<sup>2</sup>,

Hiroshi UNZAI\*<sup>3</sup>, Yumi INADA\*<sup>3</sup>, Shigeki KADOYA\*<sup>3</sup>

\*<sup>1</sup> Graduate Student of Doctor Course, Graduate School of Education,  
Nippon Sport Science University

\*<sup>2</sup> Otsuma Women's University

\*<sup>3</sup> Nippon Sport Science University

The purpose of this study is to identify the constituent goal items and to categorize them by factorically analyzing the teaching goals that one wants to acquire during lunch time. For this reason, school lunch sets the desired child's appearance, first determines the target items that make up the guidance goals that should be acquired during the lunch time, and analyzes them factorically. The method of clarifying the structure was used. Specifically, we conducted a questionnaire survey of 87 students in the teacher training course to make decisions using the five-point method from the perspective of the importance of learning about teaching goals. As a result, 14 items in 3 groups of "matters related to food and nutrition", "matters related to how to eat", and "matters related to social aspects of meals" could be extracted as the goals of guidance during lunch time.

**Key Words:** school lunch, guidance goal, lunch time

## 1. 研究の背景

日本の学校給食は、教育活動の一環として位置付けられてきた(文部科学省, 2019)。学校給食を規定している学校給食法においても、教育の目的を実現するために、学校給食の目標として、「健康の保持増進を図る」「望ましい食習慣を養う」「明るい社交性及び協同の精神を養う」「生命及び自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養う」「勤労を重んずる態度を養う」「伝統的な食文化についての理解を深める」「食料の生産、流通及び消費について、正しい理解に導く」の7項目が示されている。

しかしながら、学校給食の目標を達成するための指導内容は、『食に関する指導の手引—第二次改訂版—』(文部科学省, 2019)などに示されているものの、指導の考え方や例示が網羅的に示されており、学校でそれらすべてを同列、同等に扱うことは困難である。小学校であれば、年間にわたり日々1単位時間程度を充てて(文部科学省, 2018)、給食の準備、会食、片付けが行われている。限られた給食時間や活動の中で給食指導を行うためには、給食の時間に身に付けさせたい指導の目標を特定し、類型化することが必要である。

給食指導の目標に関する先行研究を見いだすため、学校における食育や給食指導に関する研究がみられる学会誌を概観した。食に関する指導の手引の初版が発行された2007年以降の『日本食育学会誌』、『日本健康教育学会誌』、『日本栄養改善学会誌』、『日本栄養・食糧学会誌』、『日本教科教育学会誌』の5種の学会誌を概観したが、給食指導の目標の構成に関わる論文を見いだすことはできなかった。そのことから、大学等紀要へと範囲を広げて概観した結果、鈴木ら(2010)の研究を見ることができた。

鈴木ら(2010)は、児童の給食時の配膳の乱れを正すことを目標に、「食育ランチオンマット」を開発し、学習者の3分の2に効果が認められたことを報告している。このように、特定の目標をあらかじめ設定し、その目標を達成するための方策に関する研究を見いだすことができる。しかし、

給食の時間に身に付けさせたい指導の目標について、構成する目標項目を特定しそれらを類型化した研究は管見の限りなかった。

そこで、給食の時間に身に付けさせたい指導の目標を整理し、それらを構成する目標項目を特定することが必要である。そして、これらの目標項目を類型化することが急務であると考えられる。

## 2. 研究の目的

前述した背景により、本研究では、学校給食の時間で身に付けさせたい指導の目標を構成する目標項目を特定することとそれらを類型化することを目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、次の手順で研究を進めた。まず、給食指導によって目指す子供の姿を設定した。そして、目指す子供の姿のために教師が給食の時間に子供に身に付けさせるべき指導の目標を、『食に関する指導の手引—第二次改訂版—』(文部科学省, 2019)に示されている食育の視点に関わる資質・能力の三つの柱の例示を参考に抽出した。抽出にあたっては、準備、会食、片付けの給食活動の中で教師の指導が可能な視点から判断し指導の目標として整理した。次に、限られた給食時間の中で身に付けさせるべき指導の目標を焦点化するために、各目標が大切かを問う質問紙を作成し、教員養成課程の大学生を対象に調査を実施した。そして、因子分析によって、目標の因子を抽出し、目標の項目数を圧縮した。最後に、得られた回答をもとに、給食指導の目標を新たに規定した。以下にその詳細を示す。

### 3.1 給食の時間に必要とする指導目標の抽出

給食の時間における指導の目標を整理するにあたり、まず、給食指導によって、子供にどのような資質・能力を身に付けたいのか、目指す子供の姿を設定した。

目指す子供の姿を設定するにあたっては、学校給食法に規定されている「学校給食の目標」と、

『食に関する指導の手引—第二次改訂版—』（文部科学省，2019）に示されている「食に関する指導の目標」を参考とした。これら2つの目標を参考にした理由は，第4次食育推進基本計画（農林水産省，2021）などにも見られるように，学校給食を教材として活用することで，学校における食育を効果的に推進することが期待されているからである。そのため，「学校給食の目標」に加え，食に関する資質・能力を育成することを旨とした「食に関する指導の目標」から検討することとした。その検討にあたっては，これら2つの目標でそれぞれ重視している観点を整理した。そして，両目標で共通して重視している観点から，目指す子供の姿を設定した。「学校給食の目標」と「食に関する指導の目標」の対照について，表1に示す。

まず，「学校給食の目標」の一，二は，「適切な栄養の摂取による健康の保持増進」や「健全な食

生活を営むことができる判断力を培う」など，「心身の健康や健全な食生活」を重視している。一方，「食に関する指導の目標」は，「健康で健全な食生活に関する知識や技能を身に付ける」「食生活について自ら管理したり判断したりできる能力を養う」「自他の健康な食生活を実現しようとする」など「健康や健全な食生活」を重視している。両目標とも，健康や健全な食生活を営む力を身に付けることを重視している観点から，①心身の健康を考えて食べることができる，ことを目指す子供の姿として設定した。

次に，「学校給食の目標」の四，五は，「食生活が自然の恩恵の上に成り立つことの理解を深める」「生命及び自然を尊重する精神を養う」「食生活が食にかかわる人々の活動に支えられていることへの理解を深める」など，「自然の恩恵や食にかかわる人々の活動」を重視している。一方，「食に関する

表1 学校給食の目標と食に関する指導の目標の対照（筆者作成）

学校給食の目標（学校給食法より）	食に関する指導の目標（食に関する指導の手引—第二次改訂版—より）
<p>一 <u>①適切な栄養の摂取による健康の保持増進を図ること。</u></p> <p>二 <u>①日常生活における食事について正しい理解を深め，健全な食生活を営むことができる判断力を培い，及び望ましい食習慣を養うこと。</u></p> <p>三 <u>③学校生活を豊かにし，明るい社交性及び協同の精神を養うこと。</u></p> <p>四 <u>②食生活が自然の恩恵の上に成り立つものであることについての理解を深め，生命及び自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養うこと。</u></p> <p>五 <u>②食生活が食にかかわる人々の様々な活動に支えられていることについての理解を深め，勤労を重んずる態度を養うこと。</u></p> <p>六 <u>③我が国や各地域の優れた伝統的な食文化についての理解を深めること。</u></p> <p>七 <u>③食料の生産，流通及び消費について，正しい理解に導くこと。</u></p>	<p>【知識・技能】</p> <p><u>①食事の重要性や栄養バランス，③食文化等についての理解を図り，①健康で健全な食生活に関する知識や技能を身に付けるようにする。</u></p> <p>【思考力・判断力・表現力等】</p> <p><u>①食生活や食の選択について，正しい知識・情報に基づき，自ら管理したり判断したりできる能力を養う。</u></p> <p>【学びに向かう力・人間性等】</p> <p>主体的に，<u>①自他の健康な食生活を実現しようとし，②食や食文化，食料の生産等に関わる人々に対して感謝する心を育み，③食事のマナーや食事を通じた人間関係形成能力を養う。</u></p>

註）下線と○数字は筆者が記載した。①②③の下線箇所を参考に目指す子供の姿を設定した。

指導の目標」は、「食や食文化、食料の生産等に関わる人々に対して感謝する心を育む」など「食や食文化、食に関わる人々への感謝」を重視している。両目標とも、食や食に関わる人々への感謝を重視している観点から、②食べ物を大切にすることができる、ことを目指す子供の姿として設定した。

さらに、「学校給食の目標」の三、六、七は、「明るい社交性及び協同の精神を養う」「伝統的な食文化の理解を深める」「食料の生産、流通及び消費について、正しい理解に導く」など、「社交性や協同の精神、食文化や食料の生産、流通、消費」を重視している。一方、「食に関する指導の目標」は、「食文化等についての理解を図る」「食事のマナーや食事を通じた人間関係形成能力を養う」など「食文化や食事マナー、人間関係」を重視している。両目標とも、食を通じた他者との社会的関わりを重視している観点から、③食事のマナーを身に付けている、ことを目指す子供の姿として設定した。以上のことから、目指す子供の姿を、①心身の健康を考えて食べることができる、②食べ物を大切にすることができる、③食事のマナーを身に付けている、と設定した。

次に、設定した目指す子供の姿のために、教師が給食の時間に子供に身に付けさせるべき指導の目標を検討した。指導の目標の検討にあたっては、『食に関する指導の手引—第二次改訂版—』(文部科学省, 2019) に示されている食育の視点に関わる資質・能力の三つの柱の例示を参考とした。食育の視点に関わる三つの柱の例示を参考とした理由は、食育の視点は食に関する指導がさらに実践しやすいように再整理されたもの(文部科学省, 2019)であるため、設定した目指す子供の姿のための指導の目標を抽出できると判断したからである。参考とした食育の視点に関わる資質・能力の三つの柱の例示を本論文末に資料 1 として示す。指導の目標を検討するにあたっては、給食の時間の活動を通して教師が指導することが可能な目標を抽出した。例えば、「食文化」の「自分たちの住む地域には、昔から伝わる料理や季節、行事に

表 2 抽出した指導の目標 (筆者作成)

① 心身の健康を考えて食べることができる (7項目)
食べ物に関心を持つ
栄養バランスに配慮した食生活を実践する力を養う
望ましい食事のとり方を理解する
いろいろな食品の栄養的な特徴を理解する
いろいろな食品の名前が分かる
いろいろな料理の名前が分かる
食品に含まれる栄養素が分かる
② 食べ物を大切にすることができる (5項目)
地場産物があることを理解する
行事食があることを理解する
多様な食文化を尊重する
食料の生産が自然の恩恵の上に成り立っていることを理解する
給食から食品ロス(個人の食べ残し)を考える
③ 食事のマナーを身に付けている (12項目)
食事の前の手洗いができる
よく噛んで食べることができる
よい姿勢で食べることができる
給食の準備から衛生面を考える
給食の準備から安全面を考える
給食の片付けから環境面を考える
食事のあいさつをすることができる
はしを正しく使うことができる
食器を正しく並べることができる
食事中にふさわしい話題を選ぶことができる
食事でコミュニケーションを図る
仲間との食事は心を豊かにすることを理解する

ちなんだ料理があることや、日常の食事は、地域の農林水産物と関連していることを理解できるようにする」という目標は、「昔から伝わる料理や季節、行事にちなんだ料理」は学校給食で提供することが可能であり、給食で使用する地場産物などを用いて「日常の食事は、地域の農林水産物と関連していること」を指導することが可能であるため、抽出した。一方、「心身の健康」の「1日分の献立をふまえ、栄養のバランスをよくするために、簡単な日常食の調理を考えることができる

ようにする」という目標は、給食の時間だけで扱うことが困難な「1日分の献立」「簡単な日常食の調理」が掲げられているため、抽出しなかった。

表 2 に示すように、「①心身の健康を考えて食べることができる」ことを身に付ける 7 項目、「②食べ物を大切にすることができる」ことを身に付ける 5 項目、「③食事のマナーを身に付けている」ことを身につける 12 項目の合計 24 項目を抽出した。そして、これらの指導の目標の妥当性を、教科教育を専門とする大学教員 4 名と、食育を専門とする大学教員 1 名で確認した。設定した目指す子供の姿のための指導の目標が抽出されているか、給食の活動を通して教師が指導することが可能な目標が抽出されているかの観点から検討した結果、抽出された指導の目標は妥当であると判断した。

### 3.2 質問項目の作成

抽出した指導の目標をもとに、質問項目を作成した。具体的には、抽出したそれぞれの指導の目標について、給食指導において児童生徒に身に付けさせることは大切であるかについての考えを問う 24 項目を作成し、5 件法（1：大切ではない、2：どちらかという大切ではない、3：どちらともいえない、4：どちらかという大切である、5：大切である）によって回答を求める形式とした。

### 3.3 調査時期および対象

2021 年 2 月に、協力が得られた東京都内の教員養成課程の大学生 1 年生 36 名、3 年生 51 名、合計 87 名を対象に、作成した質問項目を用いた Google フォームによる Web 調査を実施した。教員養成課程の大学生は、将来教員を目指す学生であることから、小中学校教師、栄養教諭と類似した回答傾向が見られることが予想される。また、学生は、栄養教諭制度が開始された 2005 年、食に関する指導の手引の初版が発行された 2007 年以降に小中学校で学校給食を経験していることが予想される。そのため、学校の食育が重要視されるようになってから給食指導を受けた経験からの

回答を得ることができると予想した。以上のことから、教員養成課程の大学生を調査対象とした。

### 3.4 分析の方法

抽出した指導の目標の中から、給食の時間に焦点化して指導する目標を精選するために、得られた回答をもとに因子分析を行った。なお、分析に使用したソフトウェアは、HAD（清水，2016）および Mplus 8.5 である。

## 4. 結果

分析および結果の導出に当たっては、まず、回答を集計して、データの分布を確認した（本論文末資料 2）。その結果、すべての質問項目において天井効果がみられ、正規性が仮定できないデータ分布であったため、ノンパラメトリックなデータ分析が妥当であると判断した。

第一に、質問項目の妥当性を検討するために、カテゴリカル因子分析を行った。解釈可能性の観点から探索的に因子構造を検討した結果、3 因子が妥当であると判断した。最終的に、負荷量が .40 以上の項目を因子項目とし、14 項目を給食の時間における指導の目標として抽出した。因子分析の結果を表 3 に示す。

因子 1 は、「いろいろな食品の名前が分かる」「食品に含まれる栄養素が分かる」などの項目で構成されており、「食品、栄養に関する事項」として解釈した。因子 2 は、「よい姿勢で食べることができる」「よく噛んで食べることができる」などの項目で構成されており、「食べ方に関する事項」として解釈した。因子 3 は、「食事でコミュニケーションを図る」「地場産物があることを理解する」などの項目で構成されており、「食事の社会的側面に関する事項」として解釈した。

また、各因子の信頼性を検討するために、各因子のクロンバックの  $\alpha$  係数を算出した。その結果、「食品、栄養に関する事項」が .830、「食べ方に関する事項」が .780、「食事の社会的側面に関する事項」が .719 であった。

以上の分析から、構成概念の因子的妥当性およ

表3 給食の時間における指導の目標（筆者作成）（ $n = 87$ ）

因子	指導の目標	F1	F2	F3
食品, 栄養に関する事項	いろいろな食品の名前が分かる	<b>.973</b>	-.084	-.077
	食品に含まれる栄養素が分かる	<b>.776</b>	.055	.000
	いろいろな料理の名前が分かる	<b>.791</b>	.208	.029
	いろいろな食品の栄養的な特徴を理解する	<b>.649</b>	.137	.119
	栄養バランスに配慮した食生活を実践する力を養う	<b>.667</b>	.165	.152
	食べ物に関心を持つ	<b>.418</b>	.078	.181
食べ方に関する事項	よい姿勢で食べることができる	.033	<b>.873</b>	.055
	よく噛んで食べることができる	.143	<b>.881</b>	-.016
	食事の前の手洗いができる	.029	<b>.834</b>	.004
	望ましい食事のとり方を理解する	-.111	<b>.667</b>	-.113
食事の社会的側面に関する事項	食事でコミュニケーションを図る	-.185	.101	<b>.905</b>
	地場産物があることを理解する	.230	-.169	<b>.816</b>
	給食の準備から安全面を考える	-.071	.181	<b>.644</b>
	行事食があることを理解する	.290	-.128	<b>.623</b>
因子間相関				
	F2	.395		
	F3	.330	.109	

び内的整合性を確認した。

### 5. 本研究のまとめと課題

本研究は、給食の時間に身に付けさせたい指導の目標を、因子論的に分析することから、構成する目標項目を特定することとそれらを類型化することが目的であった。

このため、学校給食によって、目指す子供の姿を設定し、まず、給食の時間に身に付けさせるべき指導の目標を構成する目標項目を指定し、因子論的に分析することから目標項目を精選し、また、その類型を明確にするという方法を用いた。

具体的には、指導目標に関して身に付けさせることの大切さという視点から5件法で判断させる質問紙調査を教員養成課程の大学生(87名)を対象に実施した。

その結果、給食の時間における指導の目標として、「食品、栄養に関する事項」に関するもの6項目、「食べ方に関する事項」に関するもの4項目、

「食事の社会的側面に関する事項」に関するもの4項目、という3群、14項目が抽出できた。

以上のことから、給食の時間における指導の目標として、14項目3類型の目標項目が特定でき、今後は、これらの構造化への検討とともに、目標達成のための具体的な指導内容が求められるといえる。

### 謝辞

本研究を行うにあたり、協力を得た東京都内の大学生の皆様に対して、感謝の意を表す。

### 引用参考文献

- 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領解説 特別活動編』東洋館出版社, p.66.  
 文部科学省(2019)『食に関する指導の手引—第二次改訂版—』健学社, pp.16-19, p.218, pp.223-228.  
 農林水産省(2021)「第4次食育推進基本計画」

<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/attach/pdf/kannrenhou-24.pdf>(2021年9月23日閲覧).  
清水裕士 (2016) 「フリーの統計分析ソフト  
HAD : 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案」『メディア・情報・コミュニケーション研究』1, pp.59-73.

鈴木洋子・阪口美香・田中志穂・谷口明子 (2010)  
「開発した『食育ランチョンマット』の小学校給食時における利用効果」『教育実践総合センター研究紀要』奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター, 19, pp.223-227.



資料1 食育の視点に関わる資質・能力の三つの柱の例示（食に関する指導の手引—第二次改訂版—（文部科学省）より抜粋）

食育の視点	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
食事の重要性	<p>・食事は人間が生きていく上で欠かすことのできないものであること、食事には空腹感を満たしたり気持ちを鎮めたりする働きがあること、<u>③仲間との食事や食味のよさは心を豊かにすること、朝食をとるなど食事は規則正しくとることが大切であり、心と体を活動できる状態にし、持てる力を十分に発揮できるようになることなど、食事の重要性や③食事の喜び、楽しさを理解できるようにする。</u></p>	<p>・食環境と自分の食生活との関わりなどを見つめ、必要な情報を収集し、健康な生活や健全な食生活を実現するために何が必要かを考え、適切に意思決定して行動できるようにする。</p>	<p>・<u>①食事に興味・関心を持ち、健全な日常生活の基盤を支えるために、自ら調理して食事の準備をしたり①栄養バランスに配慮した食生活を実践したりしようとする態度を養う。</u></p>
心身の健康	<p>・<u>①望ましい栄養や食事のとり方とともに、③手洗いやよく噛むこと、よい姿勢や和やかな雰囲気づくりは、食事の基本であることを理解し、①健全な食生活に必要な技能を身に付ける。</u>                  ・心身の成長や健康の保持増進には、朝食を含む1日3度の栄養バランスのよい食事摂取、適切な運動、休養及び睡眠が必要であることや、<u>①様々な食品にはそれぞれ栄養的な特徴があることを理解できるようにする。</u></p>	<p>・1日分の献立をふまえ、栄養のバランスをよくするために、簡単な日常食の調理を考えることができるようにする。                  ・<u>①栄養や食事のとり方などについて、正しい知識・情報に基づいて自ら判断できるようにする。</u></p>	<p>・<u>①自分の食生活を見つめ直して、主体的によりよい食習慣を形成しようと努力する態度を養う。</u></p>
食品を選択する能力	<p>・<u>①学校給食にはいろいろな食品が使われていること、日常食べている食品、料理の名前、形、品質や栄養素及び③安全面、衛生面等について理解し、これらを踏まえて簡単な調理を行うために必要な技術を身に付ける。</u></p>	<p>・<u>③食事の準備や調理、後片付けを行う際に、安全や衛生についてどういった点に気を付けることができるかを考えることができるようにする。</u>                  ・食品の品質の良否を見分け、<u>①食品に含まれる栄養素やその働きを考え、適切な選択ができるようにする。</u></p>	<p>・食品表示など食品の品質や安全性等の情報を進んで得ようとする態度を養う。</p>
感謝の心	<p>・<u>②食料の生産は、すべて自然の恩恵の上に成り立っていることを理解できるようにする。</u>                  ・<u>②食生活は、生産者を始め多くの人々の苦勞や努力に支えられていることや食という行為は、動植物の命を受け継ぐことであることを理解し、食品を無駄なく使って調理するために必要な技能を身に付ける。</u></p>	<p>・<u>②自然界の中で動植物と共に生きている自分の存在について考え、食品ロスの視点も含めて環境や資源に配慮した食生活を実践するために何が必要かを考えることができるようにする。</u></p>	<p>・<u>③食事のあいさつで、食に関しての感謝の気持ちを表現しようとする態度を養う。</u></p>
社会性	<p>・<u>③はしの使い方、食器の並べ方、話題の選び方などの食事のマナーを身に付け、協力して食事の準備や後片付けをするために必要な技能を身に付ける。</u></p>	<p>・<u>③相手を思いやることや、楽しい食事につながるために何が必要かを考えることができるようにする。</u></p>	<p>・<u>③食事が大切なコミュニケーションの場であるとういうことを理解し、コミュニケーションを凶ろうとする態度を養う。</u>                  ・健康で安心な社会づくりに貢献しようとする態度を養う。</p>
食文化	<p>・<u>②自分たちの住む地域には、昔から伝わる料理や季節、行事にちなんだ料理があることや、日常の食事は、地域の農林水産物と関連していることを理解できるようにする。</u>                  ・<u>②自分たちの食生活は、他の地域や諸外国とも深い関わりがあることを理解できるようにする。</u></p>	<p>・<u>②日本の食文化や食に関わる歴史にふれたり、諸外国の食事の様子を知ったりすることで、日本や諸外国の伝統や食文化を大切にするためには、何が必要かを考えることができるようにする。</u></p>	<p>・<u>②各地域の伝統や気候風土と深く結び付き、先人によって培われてきた多様な食文化を尊重しようとする態度を養う。</u></p>

註) 下線と○数字は筆者が記載した。下線部①②③は、目指す子供の姿の①②③に該当し、給食の時間における指導の目標24項目を抽出する際に参考にした箇所である。

資料 2 質問紙調査の回答分布（給食指導において児童生徒に身に付けさせることの大切さ）（筆者作成）

(n = 87)

数値：人数

抽出した指導の目標	大切である	どちらかという と大切である	どちらとも いえない	どちらかという と大切ではない	大切ではない
仲間との食事は心を豊かにすることを理解する	67	17	1	0	2
望ましい食事のとり方を理解する	72	14	1	0	0
食事の前の手洗いができる	78	8	0	1	0
よく噛んで食べることができる	67	17	1	2	0
よい姿勢で食べることができる	63	19	3	2	0
いろいろな食品の栄養的な特徴を理解する	52	32	2	1	0
いろいろな食品の名前が分かる	37	38	11	1	0
いろいろな料理の名前が分かる	32	39	14	2	0
食品に含まれる栄養素が分かる	37	44	5	1	0
食料の生産が自然の恩恵の上に成り立っていることを理解する	76	7	4	0	0
はしを正しく使うことができる	73	13	1	0	0
食器を正しく並べることができる	56	25	3	2	1
食事にふさわしい話題を選ぶことができる	50	28	8	1	0
地場産物があることを理解する	45	36	6	0	0
行事食があることを理解する	55	26	5	1	0
給食の準備から衛生面を考える	77	8	2	0	0
給食の準備から安全面を考える	72	14	0	1	0
給食から食品ロス（個人の食べ残し）を考える	75	12	0	0	0
給食の片付けから環境面を考える	71	13	2	0	1
食べ物に関心を持つ	65	20	2	0	0
栄養バランスに配慮した食生活を実践する力を養う	62	23	0	2	0
食事のあいさつをすることができる	80	7	0	0	0
多様な食文化を尊重する	62	22	3	0	0
食事でコミュニケーションを図る	65	19	1	2	0